水戸市（みと）

（茨城県）

市民と共に創り未来に躍動する《魁》のまち!!
基盤は水戸スタイルの教育による次世代の育成

400年以上の伝統を継承「魁の精神」による人づくり

周知の通り、わが国において大日本帝国憲法が制定されたのは、明治22（１８８９）年２月のことである。その後、国会の創設（明治23／１８９０年11月）と併せ、近代社会にふさわしい本格的な地方自治制度の魁（先駆け）として、明治22年４月１日、市制・町村制が施行されるとともに、全国31の市がまず誕生した。同年度中には東京市を含む別の９市が新たに誕生。初年度の市制施行都市は計40市となったが、これら40市は、旧藩時代から城下町など、地域の中心として機能していた都市ばかりだ。そのほとんどは、今日も都道府県庁所在都市やそれに準ずる都市へと発展、地域の中核的役割を担っている。

中でも、江戸時代初期に、将軍を輩出、あるいは補佐する「家」を意味する徳川「御三家」として出発し、江戸期を通じて政治的・文化的にひときわ重きを置かれた水戸藩の中心地もまた、「水戸市」として、最初の31市の一角を占めることになった（※水戸市の市制施行時の人口は２万５５９１人、本年10月１日現在の住民基本台帳に基づく人口総数は26万８２３１人、人口のピークは平成28／２０１６年の27万１０４７人）。

水戸の中心市街地（城下町地区）は、市制施行以前の明治４（１８７１）年に実施された廃藩置県を契機に、一足早く、茨城県の県庁所在地ともなった。従って、水戸の地における、現茨城県エリアの中心地としての役割は、慶長14（１６０９）年の水戸藩誕生以来、今日まで４００年以上も続いていることになる。

言い換えれば、水戸市はわが国の地方自治制度の根幹である「都市の魁（先駆け）」の一つで、この「魁」という言葉は、水戸市の現在のまちづくりを支える基本理念ともなっている。

例えば現行「水戸市第６次総合計画（以下、第６次総合計画）」の愛称は「みと魁プラン」だ。この場合の「魁」は、産業振興や子育て支援、市民の健康づくり、防災のまちづくりなど、都市としての魅力・活力をアップし、人口減少抑制を目指すために実施される「地域の未来への先行投資としての施策全般」を、市民に示すキーワードでもある。未来

高橋（たかはし）　靖（やすし）
水戸市長

を見据え、世に先んじて行動することを促す魁の精神は「水戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略―第2次―（以下、第2次創生総合戦略）」の基本理念とも当然、通底している。

「魁の精神こそは、実は水戸藩が始まって以来、水戸藩士に常に求められた、伝統的な精神の在り方の一つなのです」

そう語るのは、高橋靖水戸市長だ。「例えば、水戸黄門の異名で知られ、明治時代の完成に至るまで二百数十年間にわたり事業が継承された、前代未聞の壮大な出版事業『大日本史』の編さんを主導した水戸藩第2代藩主・徳川（水戸）光圀公（寛永5／1628年～元禄13／1700年）が、編さんの基本理念として示した『彰往考来／過去を明らかにして未来を考える』の精神は、今日にも通用する《真理》と言えるでしょう。

徳川光圀公の発案で200年以上の歳月をかけ編さんされた「大日本史編纂の地」記念碑（旧水戸城三の丸エリア）

幕末維新の底流を成す尊王攘夷主義の原動力となった水戸藩の藩校・弘道館

栃木県の那須山脈を源流に茨城県で海に注ぐ那珂川はかつて、水戸藩の経済を支える物流の大動脈だった

光圀公の学問や教育に対するスタンスは、学問は実際に役立たなくてはならないとする《実用の学問》や、学問をするということは、人間としてどう生きるべきかを自ら知ることとする《人の人たる道を知るための学問》という言葉などに、端的に示されています。彰往考来の精神と併せ、非常に科学的・実証的であると同時に、治者としての確固たる基本理念が感じられます。

また、光圀公の学問を重んじる精神は、第9代藩主・徳川（水戸）斉昭公（寛政12／1800年～万延元／1860年）と、そのブレーンである会澤正志斎や藤田東湖らが発展的に継承し、尊王攘夷思想や『天下の魁たらんとする精神』へとつながっていきました。それらの基本理念は、斉昭公が創設した日本最大級の藩校『弘道館』での教えなどを通じて、水戸藩士はもとより、幕末維新期に改革の志を立てた全国の若者たちに、大きな思想的影響を与え、明治維新実現の原動力となっていきました。

もちろん、現代の価値観にはそぐわない部分も、多々あるでしょう。しかし、先人の教えから真理を学ぼうとする彰往考来の精神や、空理空論でない速やかな行動力を伴った理論構築を大切にする魁の精神は、世の中全般に閉塞感が漂う現代にこそ有効な、何事にも通じる基本理念になり得るのではないでしょうか。『第6次総合計画』や『第2次創生総合戦略』の基本理念に、魁という文言を受け継ぎ、スローガンとして標榜しているのも、まちづくりにおける理念や達成目標は、速やかに実践し、成果を出してこそ、初めて市民の負託に応えたことになるという、当然の考え方からなのです」（高橋市長）

高橋市長は衆議院議員秘書を経て、平成7（1995）年5月から平成17（2005）年8月まで水戸市議会議員を、平成17年9月から平成23（2011）年1月まで茨城県議会議員をそれぞれ務めた後、平成23年5月に実施の水戸市長選に出馬し、当選。本年5月から4期13年目に入っている。

「水戸スタイルの教育」が形成する わがまちの未来づくり

水戸市における伝統的な魁の精神は、地元の経済および文化を振興し、人口減少の抑制にも資する、持続可能なまちづくり推進のための基本理念の柱と位置付けられているわけだが、水戸市はその絶対的な基盤に「次世代教育の推進」を据えている。

そこにこそ、水戸藩以来の教育重視の伝統を受け継ぐ、まさに「水戸市らしさ」の表象とも言うべき特徴が、端的に示されていると言える。

「魁の精神を実践する基盤は、それを実行できるような人材の育成にあり、育成の要諦を成すのは、幼少期からの適切な教育にあります。従って、私自身、次世代への教育こそが、現代におけるまちづくりの最重要基盤と考え、『第6次総合計画／みと魁プラン』においても、多様な施策・事業を通じて、本市ならではの『水戸スタイルの教育』を追究し、実践しているのです」（高橋市長）

水戸スタイルの教育《キャリアプラン》の一環で実施されている「おもてなしボランティア活動」の様子（二の丸角櫓内）

水戸市教育委員会が作成するリーフレット「水戸スタイルの教育」によれば、「水戸スタイルの教育とは、水戸の先人の教えを基底に、次世代をリードする人材の育成を目指し、確かな学力の定着や、郷土を愛し、社会に貢献しようとする心の育成を図る取組等を、先進的に進める教育」と定義している。

また、水戸スタイルの教育には、それらの基本理念を基盤としつつ、教育現場でのメソッドの方向性を示す《チャレンジプラン》《グローバルプラン》《キャリアプラン》《ふれあいプラン》の四つのプラン（取り組みの方向性）が設定されている。それらのプランにおける「主要目標」「具体的な取組」の概要は、およそ次の通りだ（水戸市教育委員会「水戸スタイルの教育」より抜粋、一部要約）。

◇チャレンジプラン［主要目標／確かな学力の定着、自ら学ぼうとする意欲の育成］

・学力向上サポーターの活用（水戸市任用の非常勤講師を小中学校に配置、習熟度に応じた指導、少人数指導で学力向上を図る）。／・AIドリルによる個別最適化された学習の実践（個々の習熟度に応じた問題に本人が納得いくまで取り組み、つまずきの多い単元を個別重点的に指導することで効果的な学習を実践）。／・大学との連携「つながる学び みと☆Future College」の実践（茨城大学・常磐大学・茨城キリスト教大学・筑波大学と連携し、大学教授や大学生と交流しながら、専門的な知識や技能などに触れることで、自ら学ぼうとする意欲を醸成）。／・その他（中学生の希望者を対象に、大学生サポーターや高校生ボランティアなどによる数学に特化した学習相談の実施、1人1台端末から得られる個別の教育データに応じた指導の充実ほか）。

夏の風物詩「水戸黄門まつり」は、水戸黄門カーニバル、山車やみこしの競演、水戸偕楽園花火大会など、多彩な内容で人気

◇グローバルプラン［主要目標／英会話力の向上、情報活用能力の育成、次世代リーダーの育成］

・英語指導助手の活用（小中学校にAETを配置し、実践的な英会話力を醸成）。／・イングリッシュ デイキャンプの実施（AETを中心に友達と英会話による体験活動を実施。英語漬けの環境で英会話力を向上）。／・次世代エキスパートの育成（小学6年生・中学1

水戸市（茨城県）

市政ルポ

毎年2月半ばから3月半ばまで開催の「水戸の梅まつり」は、偕楽園および弘道館が会場

市制施行100周年を記念し建設された水戸芸術館は市民の誇る国際的アート空間であり、子どもたちの学びの場でもある

水戸芸術館で開催された中学生のための音楽鑑賞会（水戸スタイルの芸術教育の一環）の様子

年生を対象に、学校の枠を超えた交流を図り、難度の高い科学や数学、芸術などの課題に協働で取り組むことで、児童生徒たちの学びの意欲を促進）。／・情報活用能力の育成（1人1台端末や大型提示装置などのICT機器を活用し、児童生徒たちの情報活用能力を向上）。

◇キャリアプラン［主要目標／郷土を愛する心を育てる教育の充実、世界に誇る水戸芸術館と連携した芸術教育の充実、体験学習の充実］

・おもてなしボランティア活動の推進（「水戸の梅まつり」で来訪する観光客向けに、小中学生が観光案内などのボランティアを実施ほか）。／・水戸教学の推進（水戸が生んだ偉大な先人の教えを学び、自己の生き方に生かすための学びの場の実現）。／・水戸ならではの芸術教育（世界に誇る水戸芸術館との連携による、多彩な芸術体感教育の実践）。／・宿泊を伴う自然教室の実施（中学2年生を対象に、泊りがけの自然体験を実施することで、友達との絆や豊かな心の醸成を図る）。

◇ふれあいプラン［主要目標／いじめの未然防止、いじめの早期発見・早期対応］

・あいさつ運動（地域・PTAとの連携によるあいさつ運動の実施）／・1人1台端末を活用した校内オンライン相談窓口（1人1台端末を活用し、児童生徒たちが教職員に対し、いじめを含めた相談を行える体制の構築）。／・SNSによるいじめに関する講演会（中学生を対象に有識者が、SNSを使ったいじめへの対処法を指導）。

以上、水戸スタイルの教育を推進する各種プランの概要をご紹介したが、そのきめ細やかさや独自性とともに目立つのが「1人1台端末」を使った、多様な取り組みだ。GIGAスクール構想の推進は、全国共通の取り組み課題だが、児童生徒たちの日常生活の悩み解決にも自在に端末を活用する水戸スタイルは、双方向性の高い情報端末の特性をより効果的に活用する一つのモデルとして、優れていると言える。

また、地域内外の大学の教員、大学生、

水戸スタイルの教育《キャリアプラン》の一環で実施される中学2年生向け事業「宿泊を伴う自然教室」（ラフティング）

高校生などが、小中学生と盛んに交流する様子は、まさに藩校・弘道館譲りの、教えと学びが混然一体となった、地域ぐるみの伝統的取り組みと言える。

まちなかに息づく「教育立市・水戸」の多様な魅力と活力

「水戸スタイルの教育の最大の目的の一つは、先人たちの教育を大切にする思いを引き継ぐだけでなく、一人一人が自分の確かな夢を自ら見つけ、それを実現するための学びが持つ《喜び》を、児童生徒たちに体感してもらうことにあります。

水戸藩時代から教育を重視してきた、水戸という場だからこそ実現が可能な学びを体験してもらうことで、地域アイデンティティを確かなものにしていきたい。その結果、将来的にたとえ水戸市を離れたとしても、水戸市で生まれ育ったことに誇りを持てれば、そのことが必ずや精神的な基盤となり、豊かな人生を送る上での助けになるはず、さまざまなタイプの教えの場や仕組みを児童生徒たちに提供するのは、そう信じているからなのです。

本音を言いますと、DNAの働きで、サケが生まれた川に戻りたくなるような、そんな効果も期待しますが（笑）、それはそれとして、故郷で仲間たちや先生方としっかり楽しく学び合い、育まれた記憶は、一生の宝物になるのではないでしょうか。水戸スタイルの教育の推進には、私自身、そんな思いも込めております」（高橋市長）

水戸スタイルの教育を基盤に実施されている、水戸市の次世代育成の成果は、若者たちによる「自主的な社会参画意識」の向上をも促している。例えば、児童生徒たちによるボランティア活動の促進は前出《キャリアプラン》などにも含まれているが、令和4年度には生涯学習課が市の各部署と市内の高校生ボランティアを結ぶ窓口活動を開始。その結果、令和5年10月に開催された、恒例《水戸黄門漫遊マラソン》では、828人の高校生ボランティアが参加するなど、ボランティア活動を「当然」と考える高校生が急速に増えている。

また、市内21の高校から本年8月現在、74人の若者たちが参加する常設ボランティア団体《水戸市サブリーダーズ会》は昭和50（1975）年設立と長い歴史を持っている。また、大学生以上の世代が中心的に参加するボランティア団体《みと青年会》も、昭和56（1981）年に設立されている。

水戸市における若者たちの地域への参画意識は、このように、伝統的な土壌として元々あった。水戸スタイルの教育は、その土壌をさらに幅広く、強固なものにしつつ

見事な梅林で知られる偕楽園（日本三名園）は、藩校・弘道館と共に水戸藩士の人材育成の基盤となった

かつての水戸城の堀であり、偕楽園の借景としても人気の千波湖は、市民の憩いの場

多くの高校生がボランティアとして運営を支える「水戸黄門漫遊マラソン」

ある施策とも言える。

さて、水戸市の市街地を歩いていてつくづく感じるのは、まちのそこここに、水戸藩設立以来400年以上をかけ、培われてきた独特の風土が息づいていることだ。現代的なビル群で構成される中心市街地に隣接して、千波湖があり、千波湖を見下ろす高台には徳川斉昭公がつくった日本三名園の一つ「偕楽園」が広がる。

偕楽園から中心市街地を挟んで、水戸城跡があり、幕末の尊王攘夷思想をリードした藩校の弘道館がある。また、水戸城跡の域内には、隣接する弘道館の衣鉢を継ぐかのように、古い伝統を持つ市立小・中学校などが立地している。

偕楽園・千波湖と水戸城跡・弘道館の中間点に位置する中心市街地には、水戸スタイルの教育の《キャリアプラン》にも関わる水戸芸術館（平成2／1990年、水戸市市制100周年記念事業として竣工・開館）がある。水戸芸術館の向かいには、本年7月に正式開館（竣工は令和4年10月）し、文化ホールとして充実した機能を持つ2代目市民会館が、モダンなたたずまいで立地している。

徳川斉昭公が弘道館と偕楽園を同時期につくったのは、緊張を強いられる勉学の場・弘道館の学習効果を高めるためには、緊張をほぐすような憩いの場も必要という「一張一弛」の観点からだったとされる。以来、400年をかけて培われてきた独特の風土が息づく市街地の様子は、この一張一弛を体現するかのような、水戸市の「メリハリのあるまちなみ」に由来しているものなのかもしれない。

今回の取材（8月25日）に当たり、このように近世・近代・現代が、魅力的に融合する水戸市の市街地を歩いてみて、もう一つ、非常に目立っていたのが、水戸スタイルの教育を享受する世代の、小中高校生たちの元気な姿だ。夏休みも後半の時期だったせいか、JR水戸駅近くに集中して立地する学習塾や予備校周辺には、常に多くの児童生徒たちの明るく談笑する姿が見られた。また、市民会館のラウンジギャラリー（勉強や休憩のスペース）で、静かに机に向かう若者たちの姿も印象的だった。さらに、水戸スタイルの教育の総本山「総合教育研究所」1階の、土曜だけ自習・学習の使用が可能な情報プラザでは、やはり静かに机に向かう児童生徒たちの姿が見られるそうだ。

また令和4年11月には、水戸スタイルの教育にも関わっている茨城大学・常磐大学の学生たちが、「若者たちの転出者を減らすための効果的な方法」「若者の転入者増加に有効な雇用」「すべての人が自分らしく生活できる都市の実現に必要なもの」などのテーマで行う「若者によるエビデンスに基づく政策提言発表会」が、高橋市長の出席の下に実施されている。

活発な雰囲気を漂わせながらも整然とした、児童生徒たちの日常的なたたずまいや、青年たちが地域課題に正面から向き合い、それに対して行政が丁寧に耳を傾ける、こうした「構造的な在り方」にこそ、水戸スタイルの教育が目指す成果の一つが、既に示されていると言えるのではないだろうか。

（取材・文＝遠藤隆／取材日＝令和5年8月25日）

水戸スタイルの教育の総本山・総合教育研究所1F情報プラザは児童生徒たちの自習スペースとしても活用されている

水戸市にとって2代目となる「市民会館」は水戸市最新のランドマーク